

福井県英語研究会 60周年を迎えて

福井県英語研究会会長

田 中 宏 明

はじめに

福井県英語研究会は、昭和34年（1959年）に創設され、今年度60周年を迎えました。中学校と高校の教員が協働して、リーディングテストや放送テストの問題作成、結果分析をしたり、英作文コンテストや英語弁論大会等の行事を開催したりすることは、現在でも、他県の英語教員が感銘を受けることであり、この基礎を築かれた先生方、その活動を営々と継続し発展させてこられた先生方に感服し、畏敬の念を抱くところです。

さて、60歳を迎えた人を祝う習わしに「還暦」がありますが、これは「十干十二支」がもとになっています。60年経つと生まれた年の干支に戻ることからです。したがって、60周年という節目の年は、これまで諸先輩方が築き上げてこられた英語研究会の業績に学び、新たな一步を踏み出すに相応しい年とも言えます。

第13回全国高校生英語ディベート大会 in 福井

その節目となる今年12月に、第13回全国高校生英語ディベート大会を福井県で開催しました。全国40都道府県において、332校が予選に参加し、都道府県大会を勝ち抜いた64校の代表選手374名が福井に集結しました。ALT20名を含む55名の先生方と164名の生徒たちがスタッフとして明るく活発に大会運営に当たり、友好的な雰囲気の中で成功裏に大会を実施することができました。出場校の先生方の熱心なご指導はもちろん、この機会に、生徒のディベート力とその向上のために教員の指導力を高めようと全県が一つになって研修会を重ねてきた成果もあり、藤島高校が2位、若狭高校が21位、高志高校が23位と素晴らしい成績を収めることができました。今後は、この大会のレガシーを引き継ぎ、ディベート力をいっそう高めていくとともに、新学習指導要領を見据えた英語力の向上に取り組んでいきたいと考えています。

評価による授業改善

さて、現在の高校1年生が受験する2021年度入試から導入する大学入学共通テストとともに英語外部検定試験の活用が話題になっています。今年度1月に実施された大学入学共通テスト試行問題についても、その配点が、リーディング、リスニング各100点となり、各技能を同等に評価する方向性が見えますが、民間の資格検定試験を活用することによって、英語4技能の評価を大学入試にも活用しようとしています。

目的や出題内容、形式が大きく異なる7団体24の資格・検定試験を活用することについては、物議を醸しているところですが、大学入試において英語の4技能を評価することについては、グローバル社会を生きる生徒たちが使える英語力を身に付けることを考えますと、英語教員として賛成すべきではないかと考えています。

福井県は、全国に先駆けて、県立高校入試にリスニングテストを導入しました。そのことは、授業における音声英語の重視にもつながり、福井県全体の授業改善が推進される原動力にもなっていると考えます。もちろん県英語研究会の諸先輩方が、英研活動を通して、教材作成や授業分析を研究してきた成果も大きく寄与していると思いますが、「評価」の在り方が「指導」の在り方に与えてきたウオッシュバック効果はきわめて大きかったと思います。その点において、大学入試に英語4技能が評価されることは、より具体的に授業改善を進める上で好ましい要因であると思います。

現在、県立高校入試において、スピーキングテストを導入するため、試行テストを行い、結果の分析や運営の妥当性などが検討されています。中学から高校、さらに大学へと、4技能評価が一貫した系統性を持つことで、学習者にとっては取り組みやすくなり、使える英語を身に付ける上でも効果が望めます。他の自治体においても、高校入試における4技能評価を検討しているところがありますが、リスニングテストをいち早く取り入れて音声英語を重視し、豊富な言語活動を通して意見や考えを伝え合うコミュニケーション能力を高める授業を展開してきた福井県だからこそ、スピーキングテスト導入を検討するに相応しいと自負しています。


英語を学ぶ動機付け

「福イングリッシュ」の監修など、福井県の英語教育に多くのご支援をいただいている立教大学教授 松本茂先生が、11月に開催された第68回全英連滋賀大会で「アクティブ・ラーナーを育てる英語教育」と題して記念講演をされました。その中で「英語学習の動機付け」について、次のようなロジックで話されました。

- ① 英語を使える人は能動的に学習した人ばかりである
- ② 動機付けされていない人の英語力はなかなか向上しない
- ③ 心が動かないと動機付けにならない
- ④ いつ、何が動機付けになるかは（本人にも）わかりにくい
- ⑤ 私の場合は？

この拙稿をお読みの県英研会員のそれぞれの先生方にも、「私の場合は？」のエピソードが、様々あることだろうと思います。松本茂教授は、高校3年生の夏に、大学生が英語でディベートをするのを見て感動し、あこがれたからだとおっしゃっていました。私の場合を、ご紹介して、この小稿を閉じたいと思います。

私は父の顔の記憶がありません。3歳の誕生日を迎える前月に、父を亡くしているからです。父は小学校の教員でしたが、家族や親戚の方々、父の墓にお参りいただく教え子の方々から、在りし日の父の話を聞いていました。放課後や休日子どもたちと遊んだり雑談したりしていた話や電車で通勤していた父を毎朝子どもたちが電車の駅まで迎えに行っていっしょに登校していた話、さらには教室の中での数々の楽しいエピソードなど、たくさん話を聞きながら、父の姿を思い描いていました。実に牧歌的で楽しそうな学校の原風景をイメージしながら、子どもの頃から迷わず教職を志していました。そして、人にやさしく、一人ひとりへの気配りをしながらも、明るくて豪放磊落な父の姿そのものが、まさしく理想の教師像となっていました。実は、家族や親戚の方々から聞くと、私の顔は父の「生き写し」だそうです。そして、そのこ



とが私の生涯の誇りであり、生きていく自信でもありました。

英語を学ぶ動機付けとなる運命の日は、中学校に入学した最初の英語の授業でした。英語の先生が、授業中に私を見て「きみは田中っていうんか？きみはお父さんいないだろう？」とおっしゃいました。いきなりのことで驚きましたが、「はい」と返事をすると、「先生は、お父さんの友達だったんだ。次の休み時間に職員室に来なさい。」とおっしゃいました。休み時間に職員室へ行くと、その先生は懐かしそうに私の顔を見ながら、学生時代の父との思い出を語ってくださいました。

その最初の英語の授業のこと、職員室でお話いただいたことは、40年以上経った今でも鮮明に記憶しています。『人間として、生きる目標であり、理想の教師像でもあった父。その父の友人から英語を教えてもらう。これは英語はしっかり勉強しなきゃいけない。』当然ながら、そういう気持ちになりました。

これが、私が英語を学ぶ動機付けとなりました。そもそも兄の影響で、小学生の頃から英語の歌を聴いたり歌ったりしていて、英語の音感やリズム感が少々具わっていたようなので、英語を学ぶことは楽しいことでしたが、この中学校の最初の英語の授業は、まさに人生を左右する天運だったと思います。

「いつ何が動機付けになるかは、本人にもわかりにくい」という松本茂先生の言葉が、心に響くとともに、運命は存在すると身にしみて思います。